オオカミくんは
わたしだけに激甘です

～幼なじみはクールな人狼！?～

清水セイカ・作
riri・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ

第一章 日向と、おいしいごはん……6
第二章 日向と、思い出オムライス……27
第三章 日向と、ほっこりチキンスープ……55
第四章 日向と、じんわりサクサクラスク……73
第五章 日向と、不穏なレモンキャンディ……98
第六章 日向と、ひんやりあっあっカキ氷……137
第七章 日向と、胸きゅんパニーニ……171
第八章 日向と、ずっと会いたかったヒト……197
最終章 日向とみんなの、しあわせごはん……226
あとがき……262

人物紹介

安西 小春

日向のクラスメート。かわいいものが大好きで、流行に敏感な今ドキ女子。

龍音寺 笑子

日向のクラスメート。おっとりしているけれど、実は柔道黒帯を持つ武闘派女子。

生駒 夏海

小学校から一緒の日向の親友。人狼のアイドルグループを追いかけている。

月森 聖

日向のクラスメート。ファンクラブができるくらい女の子たちに大人気。

紅虎 ロン

ココアの散歩中に出会ったかっこいい男の子。一心の知り合いみたいだけど――？

大神 一心

日向が小さい頃に仲良くしていた、同い年の男の子。七年ぶりに再会したけれど、彼はどうやら記憶をなくしているようで……？

ココア

日向の家で飼っているペット。小さくてかわいいトイプードル。

三ツ星 日向

料理が大好きな中学一年生。洋食屋を営む両親を尊敬していて、いつか自分もお店を手伝いたいと思っている。

第一章　日向と、おいしいごはん

『ぼく、ひなたちゃんのことわすれないよ。大きくなっていつかまた会えたら、そのときは――』

頭の上にある、ふわふわした二つの耳。やわらかそうな銀色の髪の毛と、満月みたいな金色の瞳。

今でも時々思い出す、昔仲がよかった大切な友だち。よく一緒に食べたオムライスを見るたびに、優しい笑顔の彼にいつかまた会えますようにって、そう願わずにはいられないんだ。

「……なんか、なつかしい夢見てた気がするなぁ」

お気に入りのイチゴ柄パジャマに身を包んだわたしは、上半身だけ起こして目をこすった。まだフワフワする頭でさっきまで見てた夢を思い出そうとするけど、うまくいかない。

下の階のキッチンから卵を焼いてるようないい香りがしてきて、少しの間だけボーッとしてしまった。

わたしの名前は、三ツ星日向。お母さんとおそろいの長い黒髪が自慢の中学一年生だ。

ウチは【キッチン　サニープレイス】っていう小さな洋食屋をやっていて、一階がお店で二階と三階が居住スペースになっている。

そこにお父さんとお母さんとわたし、それから愛犬のココアの三人と一匹家族で暮らしてるんだ。ココアは小さめのトイプードルで、散歩が大好きな元気いっぱいの男の子。

お父さんの料理はどれもすごくおいしくて、将来はわたしもお店を手伝うのが目標……なんだけど、そこにはちょっと変わった夢も含まれている。

それは、「人も人狼も関係ない、楽しく過ごせる場所を作ること」だ。

わたしたちの暮らすこの世界には、【人狼】と呼ばれるトクベツな存在がいる。

どうして生まれたのか、どこからやってきたのか、詳しいことは今もまだ研究中なんだって。

空想上の存在だと思っていたモノが、ある日突然目の前に現れる。それはきっと、とても怖いことなんだろう。実際教科書には、人と人狼はかつては争い合う仲だったって書

いてある。

でもそれはずっと昔の話で、今は世界中に人狼を守る団体や法律ができていて、日本の大都市にも人狼が暮らす地域がいくつかある。普通に社会に溶け込んでる人狼だって、たくさん住んでいるんだ。

彼らはすごく身体能力が高くて、貴重な存在。しかも、人間には使えない特別な力を持った人狼もいるらしくて、誰かが独占したり、ひどいことをしたりしないように、みんな気をつけている。

それからなぜか美形が多いらしく、最近では人狼が俳優やアイドルとして活躍することが増えていて、テレビでもよく特集が組まれていた。

特殊能力を持った人狼は、特別警察官として大活躍したり、世界的なマジシャンとして大人気になったりしてて、今はもうほとんどの人間は人狼っていう存在に対して好意的だ。

狼みたいなケモノの耳とシッポ、それに牙は、自由自在に出したり引っ込めたりできる人もいれば、コントロールできない人もいるらしい。

ちなみに、昔の映画でよく見かける「満月を見ると変身する」は作り話らしいけど、ホントのところはどうなんだろう？

とまあ、そんな感じでちょっと変わってはいるけど、それ以外はごくごく普通の世界。人狼を画面越しに見ることはあっても、日常で関わることはめったにない。

わたしが住むこの町には人狼だけが暮らす『専用区』っていう施設がないから、たぶん人狼自体があんまりここで生活してないんじゃないかと思う。実際、わたしが通う中学にも、人狼を公表して通ってる生徒はひとりもいないし。

だから普通の人にとっては、芸能人みたいなもの。画面越しにいつも目にするけど、それは絶対手に届かない存在。彼らがどんな人たちなのか、ホントに耳とシッポはフワフワなのか、そんな疑問はきっと疑問のまま終わる。

じゃあどうして、普通の人間であるわたしが「人も人狼も関係ない、楽しく過ごせる場所を作ること」なんて夢を持ってるのか、これには深いわけがあるんだけど——

「日向ー？　そろそろ起きないと、学校遅刻しちゃうよー？」

「分かってるー！　今行くから！」

下からお母さんのハツラツとした声が響いてきて、わたしは慌てて返事をした。結局夢の内容はちゃんと思い出せなかったけど、きっとまた見られるはずだから。

「よし、今日も頑張ろう！」

そう結論づけて、わたしはベッドから飛び下りる。朝ごはんはなんだろうって考えてると、勝手にお腹がキュルキュルと音を立てた。

「おはよう日向！」

「コマちゃん。おはよう」

「今日も蒸し暑いね」

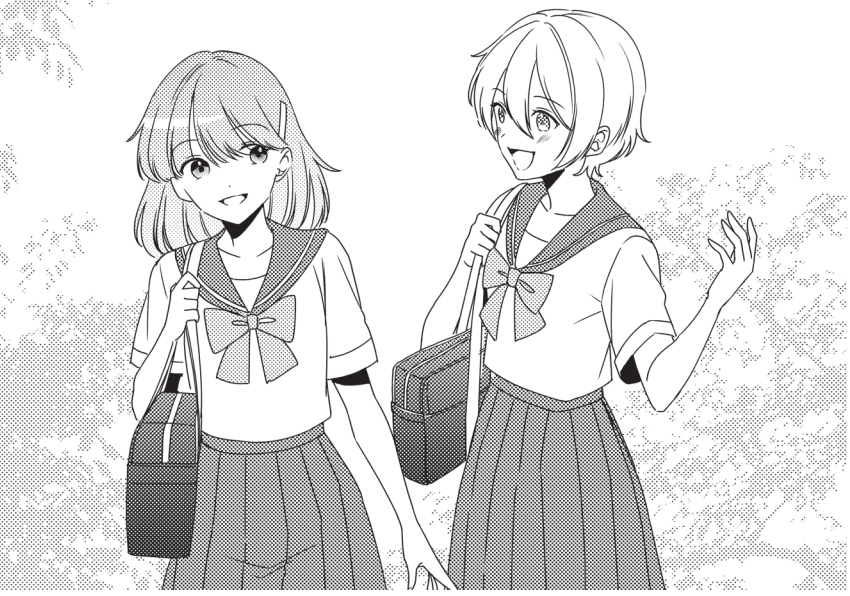
季節は六月。制服が夏服に替わって、毎日ジメジメした日が続いている。明日には梅雨入りするって、今朝テレビのお天気お姉さんが笑顔で言ってた。

今わたしに声をかけてくれたのは、コマちゃんこと生駒夏海ちゃん。小学校から仲よくしていて、家族でウチの店の常連さんでもある。

さっぱりしたショートヘアの彼女は運動神経がいい、明るいムードメーカー。小学生の時には、わたしが男の子からからかわれているといつも助けてくれた優しい子だ。

それからコマちゃんにはもうひとつ、大のアイドル好きという特徴もある。それも、人狼限定の。

「ねぇ日向、昨日の『ミュージックスター』観た!?　もう最高だったね！　さすが【ループス】だよねぇ～」



頬をピンク色に染めながら、うっとりした瞳でコマちゃんは言う。

今彼女の口から出てきたルプスというのは、人狼だけで結成された四人組男性アイドルグループのこと。最近、テレビで一日一回は必ずと言っていいほど目にする大人気グループで、もちろんみんなすごく美形だ。

彼らはコマちゃんの推しで、この話をしている時の彼女の目はいつもキラキラ輝いている。

「日向だって思うでしょ？　かっこいいって」

「うん、確かにかっこいいよね」

「だよね！　ルックスだけじゃなくて歌もメロいしダンスもキレッキレだし、メンバー同

士の絡みとかも尊くてマジ推せる！」
「コマちゃんはみんなのことが好きなんだっけ？」
「そう、私はハコ推し派なの！」
コマちゃんの言うハコ推しっていうのは、アイドルグループの誰かひとりが大好きというわけじゃなくて、そのグループのみんなを応援することなんだって。
「あんまり有名じゃない頃からこつこつ努力してきて、今やライブのチケットなんてファンクラブメンバーでも入手困難！　全部がカンペキだしずば抜けてるし、なのにファンとの交流イベも頻繁に企画してくれるし、それにそれに――」
「わ、分かったから、ちょっと落ち着いて、コマちゃん」
「あ、日向ちょっと飽きてるでしょ！」
「そんなことないよ。わたしも人狼は好きだし、もっと認められるといいよね」
すねたように唇を尖らせるコマちゃんをなだめつつ、わたしは自分の本心を言う。
「将来は人と人狼が仲良くできるレストランを作るっていうのが、日向の夢だもんね」
「うん、だからルプスの話も聞いてて楽しいよ！」
「そうなったら、いつか日向のお店に、ルプスが食レポとかしにくるかも！　うわ、今か

らめちゃくちゃ楽しみなんですけど！」
ちょっと話が飛びすぎてる気がするけど、キラキラと目を輝かせてるコマちゃんにつられて、わたしも笑顔を返した。わたしの夢を知ってる友だちは彼女だけ。お互いにお互いをよく知ってる、いちばんの仲良しなんだ。
そうしてわたしたちふたりはいつもの通りワイワイおしゃべりしながら、学校までの道のりを楽しく過ごしたのだった。
学校に到着してからクラスが違うコマちゃんとは別れ、わたしは三組の教室に入った。
すると後ろから、ひとりの男の子が「おはよう」と声をかけてくれた。月森聖くんという、同じクラスの男の子。スラッと背が高くて、モデルみたいに手も足も長い。
月森くんは、お父さんがロシア人で、お母さんが日本人のハーフ。お父さんは教会の神父さんで、イケメンとしても有名だ。栗色の髪と晴れた空みたいなブルーの目がステキなんだよね。
それに頭もよくて、小学生の頃からいつもクラスでいちばん。教え方も上手だから、分からないところがあるとみんな月森くんに聞いていた。

学年問わず人気があって、いつもみんなに囲まれている。目立つことが得意じゃないわたしとは、正反対。

それでも月森くんは、小学校からの幼なじみであるわたしによく声をかけてくれる。彼の家族もウチのお店の常連さんで、月森くんはいつも「ここのデミグラスハンバーグが世界一だ」って言いながら、おいしそうにたくさん食べてくれるんだ。

「今日も生駒さんと、楽しそうに登校してたね」

「あれ？　見てたんだ」

「あ、ああ、たまたま僕も後ろのほうを歩いてたからさ」

月森くんは慌てたように頭の後ろに手を当てながら、ちょっとわざとらしく笑った。

「コマちゃんと昨日の『ミュージックスター』の話で盛り上がってたんだ。月森くんは観た？」

「いや、僕は観てない。だって昨日は、人狼特集だったから」

眉間にギュッとシワを寄せて、あからさまにイヤそうな顔をしてつぶやく。月森くんはわたしやコマちゃんとは正反対で、人狼があんまり好きじゃないみたい。

なんでも、お父さんがロシアに住んでた頃、教会に突然人狼が現れて、ケガさせられた

んだって。月森くんが生まれたのは日本に来てかららしいけど、今もまだお父さんの腕には傷あとが残ってて、それを見るたびに腹が立つって言ってた。

「最近はどの番組も人狼を起用してばかりで、観る気にもならない」

「人狼はみんな顔立ちがキレイだもんね。昨日出てたアイドルの女の子たちも、すごくかわいかったし」

耳とシッポをフリフリさせながら踊るダンスがかわいくて、思わず夢中で観ちゃった。

「そうかな。僕はあんなコスプレみたいな格好は好きじゃない」

「へえ、そうなんだ」

今思い出しても、やっぱりあのダンスはかわいかったと思うけどなぁ。人狼が全員怖い人ばっかりなんてそんなことないだろうし、押しつけるつもりはないけど、いつか月森くんが人狼を憎まなくてすむようになればいいなって思う。

「それより、今朝の報道のほうがよっぽど衝撃的だったよ。またあの【ウルフマン】が、専用区外で暴れたって」

月森くんはそう言って、心底軽蔑するような表情をする。今彼の口から出たウルフマンっていうのは、人狼だけで結成されたグループのことで、過激な言動をする団体だと最

近話題になっている。
わたしも何回かニュースで見たことあるけど、みんな狼の被りものをしていて顔は映っていなかった。
『専用区は動物園のオリと同じ。人間と人狼の区別なく、自由な世界で生きていきたい』
リーダーらしき男の人が静かな声でそう言っていたのが、印象的だった。
具体的には、人狼の待遇改善を求めてデモ活動を行ったり、ネットで署名を集めたり、とにかく今の状態をよくしたいと思ってる感じだった。
でも最近は、人狼否定派の政治家をおそってケガさせたとか、専用区で働いてる人間を無理矢理追い出したとか、なんだか過激な様子ばっかりがテレビに映ってる気がする。
「あんなことばかりして迷惑かけておきながら、調子よく権利だけ主張するなんて。僕はどうかと思うな」
「……本当に悪い集団なのかな、ウルフマンって」
会ったこともない人たちのことを、印象だけで決めつけたくない。もちろん、誰かにケガをさせるのはよくないんだけど……
「三ツ星さんは優しすぎるんだ。世の中には自分のことしか考えてないやつらがたくさん

いる」
「でも、まだお互いをよく知らないだけで、ちゃんと話せば分かり合えるかもしれないよ」
少なくともわたしは、そうありたいって思ってる。人間だとか人狼だとか、関係ないんじゃないかなって。
『おいしいね、日向ちゃん！』
だって、あの子はわたしの大切な友だちだから。
「ごめんね、月森くんの考えを否定してるわけじゃないよ？」
「うん、分かってる。僕は三ツ星さんのそういう優しいところが、すごく……」
そこまで言って、月森くんはなぜか急にうつむいてモジモジしはじめた。彼の顔をじっと見つめるわたしと全然目が合わない。
「月森くん、どうした――」
「あっ、月森くんだ！　おはよう、月森くーん！」
不思議に思って手を伸ばしかけた時、女子たちのはずんだ声が聞こえてきて、わたしは反射的に手を引っ込めた。

「ねえねえ、今日一時間目から英語の小テストあるでしょ？　わたし分からないところがあって！」
「あ、わたしも！　わたしも月森くんに教えてもらいたい！」
月森くんはあっという間に女子たちに囲まれて、わたしはぽつんとかやの外。
そういえば、彼のファンクラブなるものが存在するってうわさを聞いたことがある。さすが人気者だと感心しながら、自分は場違いだと思ったわたしはそこから離れようと背中を向けた。
「あ……、三ツ星さん！　また後で！」
月森くんの声に振り向いて、わたしは笑いながら下のほうで小さく手を振った。

午前の授業が終わると、みんなお待ちかねのお昼休み。それぞれが机をくっつけ合い、お弁当やパンを広げる。
わたしのお弁当箱は、お気に入りの曲げわっぱ。お母さんからは「中学生にしてはちょっとしぶすぎない？」って言われたけど、これがいちばん好きなんだ。
開ける時には少しだけ木のいい香りがするし、余計な水分を吸ってくれるから冷たいご

はんもふっくらしてる気がする。
ちなみに、一時間目にあった英語の小テストは見事に撃沈……。ちゃんと復習しておけばよかったって後悔したけど、机の上にお弁当を広げる頃にはケロッと忘れていた。
「あーあ。午後イチから日本史とか、わたし絶対起きてられない」
菓子パンを頬張りながらそう口にするのは、ハルちゃんこと安西小春ちゃん。
流行に敏感なオシャレ女子で、焦げ茶色の髪をいつもかわいくヘアアレンジしている。お家が美容室なんだけど、わたしもそこでカットしてもらってるんだ。
「体育よりはマシじゃない？　食べてからすぐ走ると、お腹痛くなっちゃう」
小さくてかわいらしいお弁当箱のフタを開けながら、おっとりとした口調で言うのはエッコちゃんこと龍音寺笑子ちゃん。
小柄でマシュマロみたいに色白でかわいいけど、お家は空手道場をやっていて彼女自身も黒帯という、実は武闘派女子。
このクラスになってからの仲良し三人組で、毎日楽しい学校生活を送っている。ちなみにわたしのあだ名は、三ツ星だからサンちゃんだ。
「そういえばコマちゃんとも話したけど、みんなは観た？　昨日の『ミュージックスター』」

「観た観た！　ルプスの一橋くんかっこよかったぁ！」
「私は観てないや。人狼はあんまり好きじゃないから」
「あー、昨日は人狼アイドル特集だったもんね」
お母さんお手製のさつまいもの肉巻きを頬張りながら、わたしはハルちゃんの言葉に頷いた。
「画面越しに見てるだけでも、ちょっと怖いし」
エッコちゃんは、人狼が苦手みたい。
「えー、みんな超イケメンじゃん！　それに、アブナイ雰囲気もそれはそれでアリだし！　マジで特殊能力使えたりしたら、アニメみたいでかっこいいよね」
ハルちゃんは、コマちゃんほどじゃないけど人狼アイドル好き。
「人狼って、実はすごく仲間思いだし愛情深いんだって。『ツガイ』って知ってる？　運命の相手を見つけたら、一生その人とだけ添いとげるってやつ」
わたしがそう言うと、ハルちゃんがパッと顔を輝かせながら身を乗り出す。
「そうそう！　ツガイになるには人狼と人間じゃないと無理だから、最近はツガイ探しの恋愛リアリティショーもやってるよね。いいなぁ、わたしもイケメンの人狼とロマンチッ

クな恋したーい！」
目をキラキラさせるハルちゃんだけど、しゃべりながらも食べるのは早くて、手に持ってたパンはいつの間にかなくなっていた。
「でもさぁ、ここみたいな小さい町で人狼に会うことなんか絶対ないじゃん？」
「それは分かんないよ？　耳もシッポも隠せるんだったら、ウチのクラスにいても分からないし」
「ええ、まさかぁ！」
ちょっと嫌そうに顔をしかめるエッコちゃんを見て、ハルちゃんはしたり顔で笑う。
「それはそれで、ちょっとおもしろそうだよねー」
「もう、やめてよ、ふたりとも！」
「あはは！」
わたしは笑いながら、最後に残っていたチーズ入り卵焼きをパクッと口に放り込むと、お弁当箱のフタを丁寧に閉めた。
それからすぐに話題は変わったけど、わたしの頭の中からはしばらく人狼の話が離れなかった。

――いつか、人も人狼もみんなで楽しく過ごせるレストランを作れたら、ぜひふたりにも来てもらいたいな。

◇◇◇

「はい、足拭き終わり！　お散歩楽しかったねー、ココア」

「キャン、キャン！」

日課である愛犬ココアとの散歩を終えたわたしは、お母さんが用意してくれた夕ごはんを食べる前に、いつもの定位置にちょこんと座った。ここからだと、少しだけ開いてる厨房のドアの隙間から、お店の中がのぞける。

【キッチン　サニープレイス】

ウチのお店の名前は日本語に訳すとヒナタ、つまりわたしの名前になる。小さな洋食屋だけど、休日は予約だけで席が埋まることもあって、もう何年も通ってくれてる常連さんもたくさんいる。

ちょっと特別な日も、なんでもない普通の日も、大切な誰かとおいしい料理を一緒に食べながら、笑って過ごせるステキな空間。わたしはそれを見るのが大好きなんだ。

「いらっしゃいませ！　何名様ですか？」

「二名です。予約をしていないのですが」

「構いませんよ、こちらへどうぞ」

パキッとした白のシャツと、黒のカフェエプロン。長い黒髪をポニーテールにまとめているウェイトレスが、慣れた動作でお客さんを席に案内している。

笑顔がステキでかっこいい、わたしの自慢のお母さんだ。おしゃべり好きで、お店の常連さんたちとも仲良し。

お父さんは優しいけど口数が多いほうじゃないから、お母さんは「ふたりでちょうどいいバランス」だってよく言っている。

「三番テーブルのパスタあがったよ」

「はーい！　今行きます」

「すみませーん、追加でオーダー入りました！」

今日は金曜日の夜だから、特にお客さんが多い。

お父さんがシェフでお母さんがウェイトレス、他にスーシェフとパティシエ、それから

パートさんやバイトさんが五人くらいいて、交代制で働いているんだ。
「いいなぁ、わたしも早くお店に立ちたいなぁ」
「こら、日向！　まーたそんなところでなにやってるの」
「わっ！」
ビックリして顔を上げると、お母さんが腰に手を当てて呆れたように笑っていた。
夢中でお店の中を見ていたので、誰かが目の前に立ってることに全然気づかなかった。
「あんた、そこで店の中を見てるのが本当に好きだね」
「うん！　だってみんな、キラキラしてるんだもん」
「あはは、そういう日向の目のほうがキラキラしてるって！」
明るい笑い声を響かせて、お母さんは豪快に笑う。それから、ぽんぽんと頭をなでてくれた。
今はまだこうして見てることしかできないけど、その代わり自宅のキッチンはわたしの場所だ。
本や動画を見ながら料理を作るのが大好きで、たまには失敗することもあるけど、どうしてうまくできなかったのかを考えるのも、それはそれで楽しかったりする。

「あっ、倉橋さん！　パフェの上にミントをのせるの忘れてます！」
ドルチェ担当の倉橋さんに向かって、わたしは声を張り上げた。彼はハッとしたようにわたしとパフェを交互に見ながら、いたずらっ子みたいにペロッと舌を出した。
倉橋優牙さんはチラッと見える八重歯がかわいい、気さくで明るいお店のムードメーカーだ。スタイルがよくて、黒髪と赤いインナーカラーがイチゴみたいでとても似合っている。
パティシエの専門学校を出てからすぐ、ウチのお店で働きはじめたらしい。
「さすが日向ちゃん。俺よりずっとパティシエに向いてるよ」
「えへへ、そうかな？」
「おい、倉橋。ミスをごまかすんじゃない」
横から倉橋さんを叱るのは、スーシェフの神山心吾さん。お父さんの次にキッチンを取り仕切る人で、昔からうちで働いてくれている。
ちなみにレストランでは、シェフがリーダーで、スーシェフが副リーダーみたいな感じらしい。って言っても、ウチは小さなお店だし上下関係はそれほど厳しくないみたいだけど。

神山さんはお父さんと同い年くらいで、海外を転々としながらいろんな国で料理の修業をしてたんだって。

背が高くて真面目であんまり笑わないから怖いって思う人もいるらしいけど、わたしは神山さんのことを怖いと思ったことがない。物腰がやわらかくて優しいし、ハチミツ色の髪と瞳もすごくキレイだ。

神山さんの右手の甲にあるアザは、すごく昔に知り合いをかばってできたヤケドのあとなんだって。今は痛くないらしいけど、結構目立つから見るたびに心配になる。

一緒に働いているパートさんやバイトさんもみんな優しくていい人ばっかり。将来わたしがお店に立つのが楽しみだって、いつも励ましてくれる。

「早く日向と厨房で働きたいって、お父さんも心待ちにしてるんだから。ね、お父さん！」

「い、いや、俺は別に」

「もう、照れちゃって！　あはは！」

もくもくと調理をしているお父さんの肩を、お母さんがぱしん！　と叩く。わたしや倉橋さんの笑い声が響いて、お店の雰囲気もふわんと明るくなった。

第二章　日向と、思い出オムライス

学校が終わった、ある日のこと。雨のせいで散歩が中止になり、不機嫌なココアとリビングでテレビを見ながら遊ぶ。

なにをするにも全力で、甘えてくる時は目をトロンとさせるし、綿あめみたいな触り心地も最高だし、存在そのものが尊くてかわいい。

ココアが特に喜ぶのは、アゴの下を指でサワサワすること。シッポをフリフリさせるココアと一緒に、ソファで夕方のご当地グルメ番組を観る。

今日は映えパンケーキ特集だから、楽しみにしてたんだよね。

「あ、あれおいしそう」

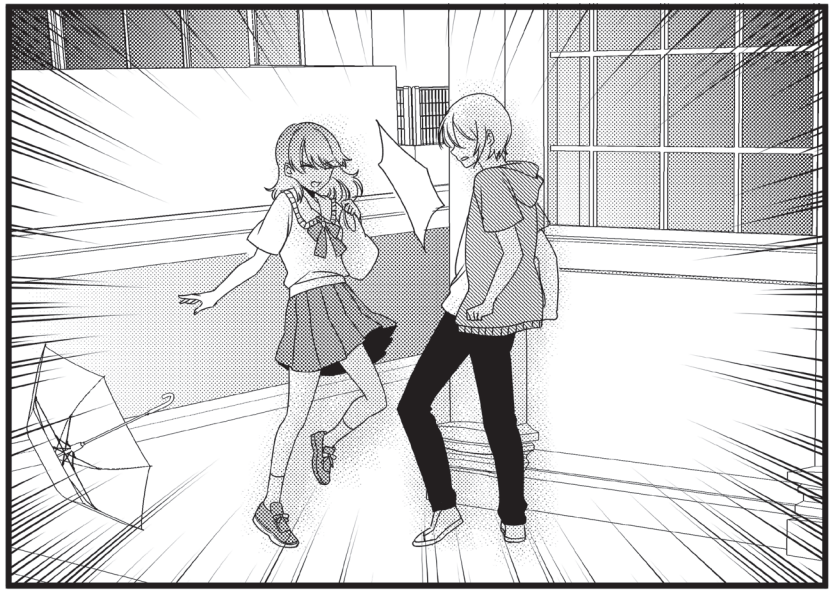
目をひかれたのは、甘さ控えめのふわふわパンケーキ。横に添えられているのはフルーツでもクリームでもなく、目玉焼きとソーセージだ。

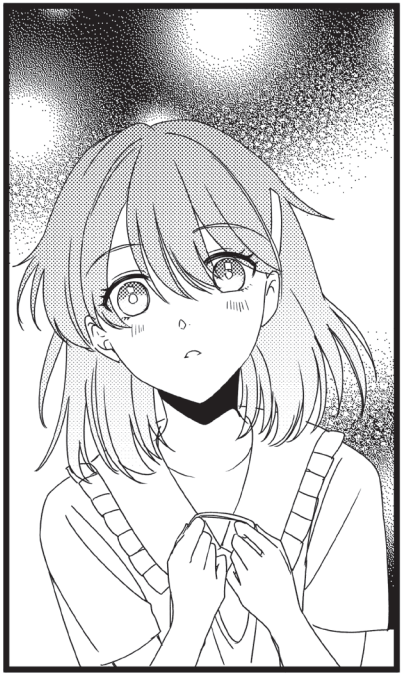
これなら朝ごはんにもピッタリだし、明日は土曜日だからちょうどいい。わたしの頭の

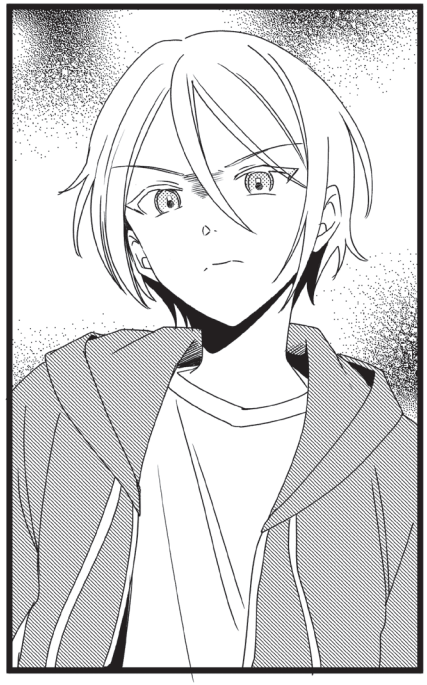
中がパンケーキでいっぱいになる。
「そういえばホットケーキミックスって、この間使い切っちゃったよね。ベーキングパウダーもないし」
キッチンのパントリーを確認したけど、やっぱり見当たらない。窓から空模様を確認した感じだと、この小雨具合ならなんとかなりそう。
「夕飯食べる前に、ササッとコンビニ行ってこよう！」
思い立ったら、すぐ行動。赤色のリュックを背負って、わたしはココアの頭をヨシヨシとなでた。
「ちょっとだけ出かけてくるから、いい子で待っててね」
「キャイン！」
「すぐ帰ってくるから」
玄関でイチゴ柄のかさを持って、ブーツタイプの長靴をはく。本当に小雨かどうか手を伸ばして確認してから、わたしは小走りでコンビニへと向かったのだった。

「いらっしゃいませー！　あ、日向ちゃん。こんばんは」

「こんばんは！」
毎週のようにコンビニに行っているので、顔を覚えてくれたアルバイトのお姉さんが、わたしを見てニコッと笑った。笑うと倉橋さんみたいに少しだけ八重歯がのぞいて、それがかわいい。
「ホットケーキ作るの？」
「はい！　テレビで特集やってて、急に食べたくなっちゃって」
「あはは、日向ちゃんらしいね」
お姉さんはおしゃべりしながらも、テキパキした動きですぐに会計を済ませてくれた。
「雨がひどくならないうちに、気をつけて帰ってね」
「ありがとうございます！　じゃあ、また」
ホットケーキミックスをしっかりリュックにしまうと、わたしは足早にコンビニを出た。
家を出た時は小雨だったのが、あっという間に地面を叩きつけるくらいの大雨に変わっている。
遠くで雷の音が聞こえたと思ったら、しばらくして空がピカッと黄色く光った。
「やば、ココア雷嫌いなのに……！」







ひとりで怖い思いをさせたくなくて、思わずダッシュで走った。長靴の中に雨が染みても、前髪がおでこに張りついてもお構いなし。

そして、その勢いのまま店の前の角を曲がった瞬間――

ドンッ！

誰かにぶつかり、わたしの手からイチゴ柄のかさが飛んでいった。

「いってぇ……！」

「わぁ!! ご、ごめんなさい。わたし、ちゃんと前を見てなくて……っ！」

声をかけた瞬間、その人はビクッと肩を震わせた。雨で張りついた前髪のすきまから、鋭い目つきでわたしをにらみつける。

キラキラと光る満月みたいな金色の瞳と、雨に濡れてもキレイな銀色の髪。今でもわたしの心の真ん中にいる、大切な友だち。

「もしかして……いっしん……くん？」

会うのは七年ぶりくらいだから、背格好も雰囲気も変わってるけど、顔を見たらすぐに分かった。

まさか、こんな風に再会できるなんて夢にも思わなかったけど……

「お前、なんで俺の名前を知ってるんだ」
「え……っ？」
うなるような低い声と、身構える姿勢。一心くんはわたしのことをにらみつけたまま、一歩後ろに下がった。
「覚えてないかな？　わたし、三ツ星日向だよ。昔、心さんと一緒にこの家で――」
「それ以上近づくな！」
駆け寄ったわたしに、彼は大声で怒鳴る。ピタッと足が止まって、その場から動くことができなくなった。
一心くんは鋭い牙をむき出しにして、わたしを威嚇している。まるで、大嫌いな相手にそうする野生動物みたいに。
「ほ、本当に覚えてないの？　わたしたち、昔すごく仲がよかったんだよ」
「お前なんか、知らない」
「で、でも――」
「俺は人間が嫌いなんだ！」
『ぼく、はなればなれになっても、ひなたちゃんのことぜったいわすれないから！』

そう約束して、ふたりで泣きながらゆびきりげんまんをした。わたしは、あの時のことを忘れた日なんてないのに。
今言われた言葉が胸に突き刺さって、なにもできなくなる。どんどん強くなる雨がわたしの体をビショビショに濡らしても、すぐ近くで雷鳴が響いても、動くことができなかった。
だって、あの一心くんがまさか人間を嫌いだって言うなんて、信じられなかったから。
「一心くん、どうして……」
カランコロン。
雨音に混ざって、お店の扉が開くベルの音が小さく聞こえた。
「ちょっと日向、そんなところでなにやってんの!?　ずぶ濡れじゃない！」
かさを手にしたお母さんが駆け寄ってきて、わたしを雨から守ってくれる。
「お母さん、わたし……」
「あの」
一心くんが引きとめたのは、わたしじゃなくてお母さんのほう。こっちには、目もくれない。

「俺、この店に用があって」
「あらっ、あなた……とりあえず、ふたりはすぐに中に入って！　早くしないと風邪ひいちゃうから」
お母さんはそう言って、わたしの背中をぐいぐい押す。
それ以上言葉を交わすことなく、わたしは一心くんとともに店の中へ入ったのだった。

◇◇◇

これは、わたしがまだ五才だった頃の話。
その日、いつも元気なお母さんが朝から熱を出して寝込んでいた。わたしが風邪をひいた時、いつもすり下ろしたリンゴを食べさせてもらってるから、お母さんにもそれを作ってあげたい――そう思って、わたしはリンゴを買うためにひとりで家を出てしまったのだ。
だけど途中で迷子になって、泣きながらウロウロしていた時、運悪く河川敷で足をすべらせて川に落ちた。もがけばもがくほど鼻や口から水が入ってきて、どうすることもできなくて、このまま死んじゃうのかなってすごく怖かった。

そんなわたしを川から助け出してくれたのが、大神心さん。銀色の長い髪にふわふわの耳とシッポの、人狼だった。
震えながら大泣きするわたしを「もう大丈夫よ」と言いながら、優しく抱きしめてくれた。その時の温かさは、今でもはっきり覚えている。
心さんはおっとりしたしゃべり方のキレイな人で、たぶんお母さんと同じくらいの年齢だと思う。
お母さんとお父さんはわたしを助けてくれた心さんにすごく感謝して、勝手に家を出たわたしを泣きながら叱った。
どういう経緯でそうなったのか詳しくは分からないけど、その日から心さんはしばらくウチで一緒に暮らすことになった。心さんの息子、一心くんも一緒に。
彼は心さんと同じ銀色に光る髪で、金色の瞳はまんまるのお月様みたいだった。一心くんは人見知りなのか、最初は心さんの後ろに隠れてばっかりだったけど、同い年のわたしたちはすぐに仲良くなった。
笑うと片方だけ小さな八重歯がのぞいて、銀色の耳とシッポがピョコピョコゆれるのがすごくかわいかった。

保育園から帰ってきたら、ずっと一緒。おままごとも、絵本も、お姫様ごっこも、優しい一心くんは、いつもわたしのしたい遊びに付き合ってくれていた。

たくさん遊んだ後は、ふたりでお父さんのごはんを食べる。特にオムライスが大好きで、口のまわりに真っ赤なケチャップをいっぱいつけていて、それをわたしが「もう、しょうがないなぁ」ってお姉さんぶりながら、拭いてあげてた気がする。

『このオムライス、ほんとうにおいしいね。ひなたちゃんのお父さんはすごいや』

『いっしんくんのお父さんは、今どこにいるの？』

『おしごとで、うんととおくにいるんだって。ひなたちゃんみたいに、まいにちは会えない』

そう言って、オムライスを食べる一心くんの手が止まる。今にも泣き出しそうなその顔を見て、わたしは一心くんの手をギュッと握った。

『そんなかおしないで！　いつかわたしがお父さんよりもっとおいしいオムライスを作るから、そしたら、いっしんくんがいちばんにわたしのおきゃくさんになってね！』

『ほんとう？　ぼく、すごくたのしみ！』

その時の一心くんは嬉しそうに笑ってくれたっけ。

『ひなたちゃんならできるよ』って言ってくれた言葉は忘れられない。

『ひなたちゃんは、ぼくみたいなじんろうがこわくないの？』

一度そう聞かれた時は、一心くんがどうしてそんな質問をするのかまだ理解していなかった。だからただ素直に、正直な気持ちを言葉に込めた。

『ちっともこわくないよ！　わたし、いっしんくんのことだいすきだもん』

『ぼくもひなたちゃんのこと……だ、だいすきだよ』

『これからもずっとずっと、いっしょにあそぼうね』

『うん！』

でも、そんなわけにもいかなくて——

しばらくしてから、心さんと一心くんは遠くへ引っ越すことになった。大泣きしながら最後まで『嫌だ！』ってワガママを言ってみんなを困らせていたわたしに、一心くんが泣きながら言ってくれた。

『ぼく、はなればなれになっても、ひなたちゃんのことぜったいわすれないから！』

『ほんとう？　やくそくしてくれる？』

『うん、やくそく！』

わたしたちは小さな小指を絡ませ合って、ゆびきりげんまんをした。
『大きくなっていつかまた会えたら、そのときは――』
続きは、遠い記憶の中に閉じ込められたまま。優しくてふんわりした一心くんは、今もまだわたしの心の真ん中にいる。
大きくなるにつれて、人間と人狼の間には見えないカベがあるってことを理解するようになったけど。
一心くんのおかげで、わたしに夢ができた。彼がいつでも安心して会いにこられるように、みんなが笑顔になれるような場所を、いつか絶対に作ってみせるって。

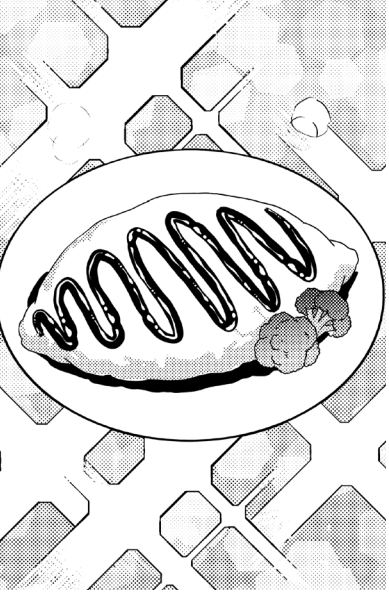
「……いけない、つい長湯しちゃった」
あれからすぐお風呂に入るようお母さんに言われたわたしは、昔の思い出にひたりながらボーッと湯船に浸かっていた。しばらくして、一心くんもずぶ濡れだったことを思い出して、慌ててお風呂から上がる。
リビングに行く途中の廊下でタオルを頭からかぶった一心くんとすれ違ったけど、目も合わせてもらえなかった。沈んだ気持ちのまま、リビングのソファに縮こまりながら座る。

「くうん」
すぐにココアが寄ってきて、わたしにすりすりとほっぺたを擦りつけてきた。いつもだったら元気いっぱいに突進してくるけど、わたしが落ち込んでることに気づいて励ましてくれてるみたい。
「……ありがとう。ココアは優しいね」
ふわふわであったかいココアをなでていると、ふいに一心くんの耳の感触を思い出した。わたしが触らせてってお願いすると、いつも恥ずかしそうにモジモジしながら、『ちょっとだけだよ』って頭をこっちに向けてくれたっけ。
一心くんはすごく優しくて、ワガママだったわたしのお願いも聞いてくれた。だから調子に乗っちゃって、お母さんに叱られたことも一度や二度じゃなかったと思う。
わたしが怒られるたびに、一心くんのほうが泣きそうな顔をしながら『ごめんね』って謝っていた。
転んで膝をすりむいた時も、お気に入りのヘアピンを壊した時も、かけっこでいちばんになれなかった時も、わたしよりも悲しい顔をしてなぐさめてくれる。そんな優しい一心くんのおかげで、嫌なことがあってもすぐ笑顔になれた。

「……昔のことを忘れてたって、今からたくさん話せばいいだけだもんね！」
一心くんが遠くに行ってから七年くらい経つし、覚えてなくても不思議じゃない。だったら、昔のことばっかり思い返すんじゃなくて、今の一心くんをもっと知る努力をしなきゃ。
少しくらい雰囲気が変わっていても、彼は間違いなく一心くんなんだから。
「よし、そうと決まればさっそく行動開始！」
ココアの喉元を優しくなでてから、わたしは善は急げとばかりに勢いよく立ち上がった。
「お父さぁーん！　ちょっとお願いがあるんだけどー！」
窓を打ちつける大雨に負けないくらい大きな声を張り上げながら、わたしは一階に続く階段をダッシュで駆け下りたのだった。

しばらくして、一心くんがリビングにやってきた。ドライヤーを使っていないのか、くしゃくしゃになった銀色の髪がぺたんとほっぺに張りついてる。
金色のキレイな瞳はずっと不機嫌そうなまま。話しかけるなオーラを放つ彼に、ちょっと尻込みするわたし。大好きな幼なじみといえど、わたしの記憶の中にいる一心くんと目

の前の一心くんは、全然違って見えるわけで……
って、弱気になっちゃダメ！　頑張るって決めたばかりなんだから、負けるな日向！
「さっき、お父さんにお願いして急いで作ってもらったんだ。この大雨だし、お客さんもいなかったから」
つとめて明るい声を出しながら、わたしはダイニングテーブルを指差した。そこには、できたてのオムライスが二つ、白い湯気を立てながらおいしそうに輝いている。
「夕飯、まだだよね？　よかったら一緒に食べよう？」
「俺はいらない」
言うが早いか、一心くんのお腹がぐうぅぅーっと大きな音を立てて、代わりに空腹を知らせてくれる。
「……」
気まずそうに顔をそらすのが、なんだか一心くんらしいってちょっとだけ思った。昔から恥ずかしがり屋さんだったから。



「わたしも、お腹空いちゃった！　お父さんのオムライス、ホントにおいしいから食べてみて」
「だから、俺はいらないって――」
その時また、彼の言葉を否定するみたいにお腹が鳴った。さっきより、さらに大きく響く。
「ち、違う！　これは……っ」
そしてトドメ、三度目のぐうううう！　って音。
「あはは、ごめん！　連続三回はさすがに笑わずにはいられないかも」
「……くそっ！」
笑わないようにほっぺたを膨らませてこらえてたけど、とうとう我慢の限界。目元にじんわりにじむ涙を指でぬぐいながら、わたしは一心くんに向かって手招きをした。
「ほら、食べよう」
観念したのか、わたしの後に続いて一心くんもしぶしぶ席に着く。
「いただきまーす！」
「……はぁ」

正面から聞こえる深いため息は、聞こえないフリをしておこう。
お店で出すオムライスにはじっくり煮込んだデミグラスソースがかかってるけど、あえてケチャップでってお願いした。
わたしたちが小さい頃よく作ってもらってたのが、このケチャップバージョンのオムライスだったから。あの頃と違って、今はもうデミグラスのソースも食べられるようになったんだろうけど、なんとなくこっちを一緒に食べたかったんだ。
スプーンで軽く卵をつつくと、ふるっとおいしそうに揺れる。いつもより多めにすくったそれを、豪快にぱくんと頬張った。
「んー、やっぱりこれおいしい！」
何回食べても、絶対に飽きない。小さい時から数え切れないくらい食べているのに、口に入れた瞬間、毎回感動しちゃうくらい、わたしはこのオムライスが大好きだ。
わたしもたくさん練習してるけど、まだまだお父さんみたいなフワフワでトロトロにはほど遠いから、昔に交わした一心くんとの約束を果たせるのはずっと先になりそう。
「いただき、ます」
小さな声でそう言って、一心くんはわたしの半分くらいの大きさに開いた口に、スプー

ンを運ぶ。
「……うまい」
素直な感想がこぼれた後、一心くんはすぐにばつが悪そうな顔で口元を手でおおう。
「でしょ!? お父さんのオムライスは、世界一だと思うんだ！」
オムライス好きなのが変わっていないことに、つい声が弾む。最初よりもっと大きな口で、わたしも二口目。
『ぼく、このオムライスがせかいでいちばんすき！』
いつの間にか夢中で食べてる彼を見つめながら、つい昔の面影を重ねてしまった。
「小さい頃もこうやってふたりでこのテーブルに座って、よくオムライス食べたよね。その時はふたりとも子ども用のイスを使ってたけど、実はあのイス今も物置に――」
カチャン！
わたしの言葉を遮って、一心くんが持っていたスプーンを乱暴に置く。
「覚えてない」
「あ、ごめんね。別に責めてるとかじゃないよ。かなり昔のことだし、忘れて当然っていうか」

「そうじゃない」
キレイな金色の瞳には、わたしは映っていない。どこか遠くを見てるみたいで、なんだか寂しくなる。
「俺には昔の記憶がない」
「え……っ」
「だから、どんなに昔の話をされても無意味だ」
「一心くん……」
まさか、一心くんの身にそんな大変なことが起こっていたなんて、想像もしていなかった。小さかったから、わたしを覚えていないだけだと思ってた。
「あの、ごめんね。わたし、なにも知らずに無神経なことばっかり言って」
「別に、謝られるようなことじゃない」
彼は突き放すような言い方をして、そのまま席を立つ。さっきまでは目も合わせてくれなかったけど、今度は冷ややかな視線をわたしに向けた。
「今の俺は、人間となれ合うつもりはない。昔仲がよかったとしても、記憶をなくした俺にはなんの意味もない」

「で、でも！　わたしは今の一心くんとも仲良くなりたいと思ってるよ！」
「余計なお世話だ」
「待って、一心くん！」
引きとめようと立ち上がったわたしに構わず、一心くんは背を向けてリビングから出ていった。完全に拒絶されて、追いかけることもできなくて、わたしはうなだれる。
ふと目に入ったのは、彼のお皿。お米の一粒さえ残らずピカピカだった。
「……やっぱり、今もオムライス好きなんだ」
どうしようもなく悲しい気持ちになるけど、一心くんはなにも悪くない。きっと記憶がなくてつらい思いをしてきただろうに、わたしはのん気に昔の話ばっかりしてしまった。
しかも、心の中では「いつかは思い出して昔の一心くんみたいに優しく笑ってくれるはず」なんて、自分勝手な期待までして。
「一心くんの気持ちも考えずに、わたし最低だ……」
まだほとんど減っていない自分のオムライスを見つめながら、わたしはこぼれそうになる涙を手の甲で乱暴に拭ったのだった。

そして、次の日の朝。
夜のうちにたくさん悩んだわたしは、もう一度一心くんと話をしようと決心した。昨日彼がウチに泊まることは、お母さんから聞いていたのだ。
いつまでもひとりでウジウジしてるのは、わたしらしくない。昔の思い出を大切にしたい気持ちと、今の一心くんを大切にしたい気持ち。どっちかじゃなくて、どっちも尊重したい。
そのためには、とにかくもっと話さなきゃダメだ。押しつけるのも違う気がするけど、諦めるにはまだ早いと思うから。
気合を入れたい時は、高い位置でポニーテールがお決まり。
「お母さん、おはよう！　一心くんは!?」
「な、なに日向！　朝から元気だね」
リビングに顔を出すなり、わたしはまくし立てるようにしてお母さんに尋ねた。
あまりの勢いにちょっとビックリさせちゃったけど、気合が入りすぎただけだから許してほしい。
「一心くんなら、まだ部屋にいると思うけど」

立ち読みサンプルはここまで

「分かった、ありがとう！」
「あ、呼びにいくならついでに――」
「朝ごはんでしょ？　それも伝えてくる！」
お母さんが言い終わる前に、さっき来たばかりのリビングを飛び出していく。「もう」だか「まったく」だか聞こえた気がしたけど、今はそれどころじゃない。
コンコン。
「一心くん、起きてる？　朝ごはん一緒に食べよう」
この部屋は、昔心さんと一心くんがしばらく住んでいた場所。ふたりがいなくなってから使われてなかったそこに、また一心くんがいることがなんだか不思議に感じる。
ノックをしてからしばらく待ってみても、返事はなくシンと静まり返ったまま。昨日の冷たい瞳を思い出すと、もうわたしとは話したくないのかなってマイナスの方向に考えてしまう。
「一心くん、まだ寝てるの？」
もう一回ノックしてみるけど、やっぱり返事はない。
「……はぁ」

いやいや！　落ち込むにはまだ早い。本当にただ寝てるだけかもしれないし、もうちょっと時間を置いてからまた声をかけにこよう。
そう自分に言い聞かせて、クルッと体の向きを変える。リビングに戻ろうと一歩進んだ瞬間――
ガタン！
部屋の中からなにかが倒れたような大きな物音が聞こえてきて、わたしは思わずビクッと肩をすくめた。すぐにドアに向かってさっきよりも大きな声で呼びかける。
「ねぇ、今すごい音がしたけど、なにかあった？」
「……っ」
「一心くん、ごめん開けるよ!?」
さすがに心配になって、返事を待たないままわたしはドアを開けた。
すると、ベッドにもたれかかるようにして倒れている一心くんの姿が目に飛び込んできた。
「一心くん!!　ちょっと、大丈夫!?」
「う……っ」